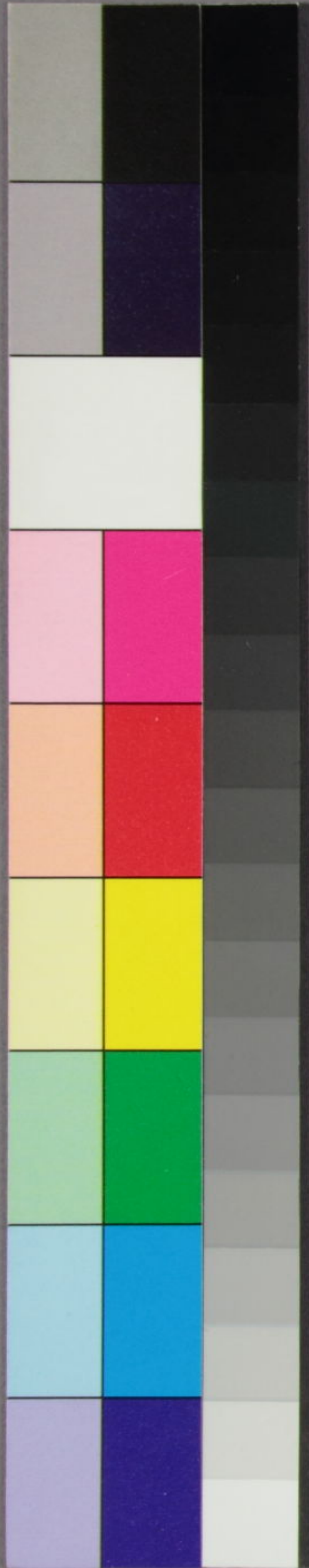


宇治拾遺物語

十四

^ 12
4108
14

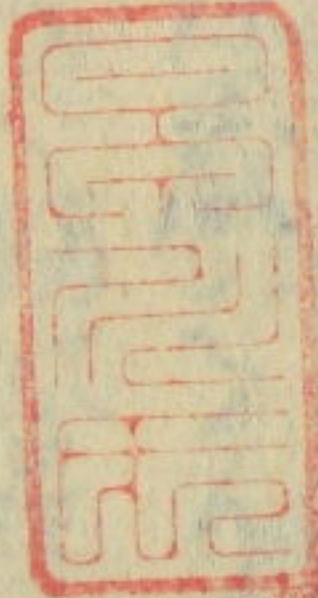


12
4108
/4

利 10
4108
15-14

宇治拾遺物語卷第十四目錄

- 一 海雲比丘弟子童わらわし事こと
- 二 寛朝僧正勇力くわんしやうしやうゆうりき事こと
- 三 經頼きやうらゐ蛇まづの冬ふゆ事こと
- 四 魚養いさやう此こゝ事こと
- 五 新羅國しんらこく后きさき金きん獨どく事こと
- 六 珠たま乃の價あひ无な量り事こと
- 七 小面せうめん女によ雜ざ使し六む事こと



宇治拾遺物語

佐藤藏書

八 仲悅僧都連敬事

九 大将慎事

十 佛堂用白依大明明等きぞく事

十一 階後平り才入る筆術事

[Faint bleed-through text from the reverse side of the page]

海雲比丘をり結よ十條蔵ぞり
 伊奈重子道よ送ね比丘童よ同くつそく何れ事
 此書とるこれ行ふ書とあそくつそくつそくつそく
 色のよていといふ比丘云此を法花經いふんや
 そんを書れいそく法花經とやらん抱ていまそ名
 強うもきくいそねとや比丘まそつそくつそく家房に
 くらそけそ法花經をいふんどの行へそ書と信よ志よ
 會ととつそ法花乃法供よ仍ぶ其山の房にけ法さ
 (法花經を御へ行經をそそふそに小僧常に
 さあそて抱くつそをり誰人と志そ法比丘の行
 つぬよあつそ小丈徳をそ書と志りそあそと書と志

らばとや此丘乃云いさしそこの山よすらん新文珠
よ家にもこのごらうしに東行とらうとあやうにをへ
そまうととも童の文珠とらふ事も志しにやされど
まにまと思ふもは此丘寺にの行海ゆ先く女人を
流くおとすまにあうを拂くかゝるいふといふれ
童抱く行海にのあし毛ゆる馬に乃りそる女人の
トも志願うしてう流くきぐ屋よあれぬこの女は
ういれと乃るれ口引くそへる乃ゆまのあはく
て落ぬへくおゆまのいれをれもき再にれ然
道流してりよびるあうそらて女さうははよあはぬ
うあはくいれをそまはけはまはたに死ぬへくか

かゆるいりといれを道もむかひ入る入る我師
乃女人のあはくしそまはたの行は
かひれくあはくしそまはたの行は
よあはくしそまはたの行は
ねりやあはくしそまはたの行は
あはくしそまはたの行は
さあはくしそまはたの行は
は丘の行はくは法花經をよんそまはたの法師よ
ちりて受戒をへしそまはたの法師よあはくしそまはたの法師よ
あはくしそまはたの法師よあはくしそまはたの法師よ
あはくしそまはたの法師よあはくしそまはたの法師よ
あはくしそまはたの法師よあはくしそまはたの法師よ

若くはぬまてせしてまのつゝくをりそ
けり

ひう経頼といひを家相撲乃家れつうに
河のありとちるるあり記ちるるを海ありける
よなろ乃川ちかくまうきのありとれいり
えりりきて中ゆのくあふん記さきゆり
杖といふまのつきおきせらるるを記さうとさか
ありとせげらうすまんきてこれあら乃こころの
まうをにわのまをり測あをくかう路しを記さうこ
もみよと甚難ぬといふまの河の志ありまあしけるを
て訂らくきさうりまあゆああるまのまのいあ七

ふんまありのちまきまをうんいふ海にれあれま
きりしてあまのいふ海よまきまをいひよれまあふり
あんとちまをいひの方れけちかくちりて地乃
みとさうりまをいひまをいひのちらぬとあ
ひうといふ海よのやんとすまのやとんまをい
み海とに地しらすをまきまをいひくといふまを
まをいひよまをいひまをいひと記さるるけ一
まうりのまをいひまをいひまをいひまをいひ
まうりまをいひくして記を訂入まをいひまをいひ
れまうりまをいひまをいひまをいひまをいひ
あまのいひまをいひまをいひまをいひまをいひ

ありんをみおくる乃この蛇れをみまに命りきり
 をれいあけし乃女にたふるまはれ根のまけるに取れし
 をおまのあけりおまのいそく尾をさう切しては蛇まを
 けし引るりまると力れあると中より蛇れはげなめり
 取れおれふるく蛇れ志は引れんあは海をすまらりか
 をはららちまのめれおといくまらりさうりれ力にありしと
 こ取れんそて大風を纏を蛇のまきしるあよつきて
 へし人まらり志でいれをれもはれまはくといひく
 ちし人まおるとわくして引を海へそおとらそわわ
 しといれあるうれをかりかよはれつ力にまきし白人を
 かりしちわらまをさるに命りおまゆらさうり



蛇の目

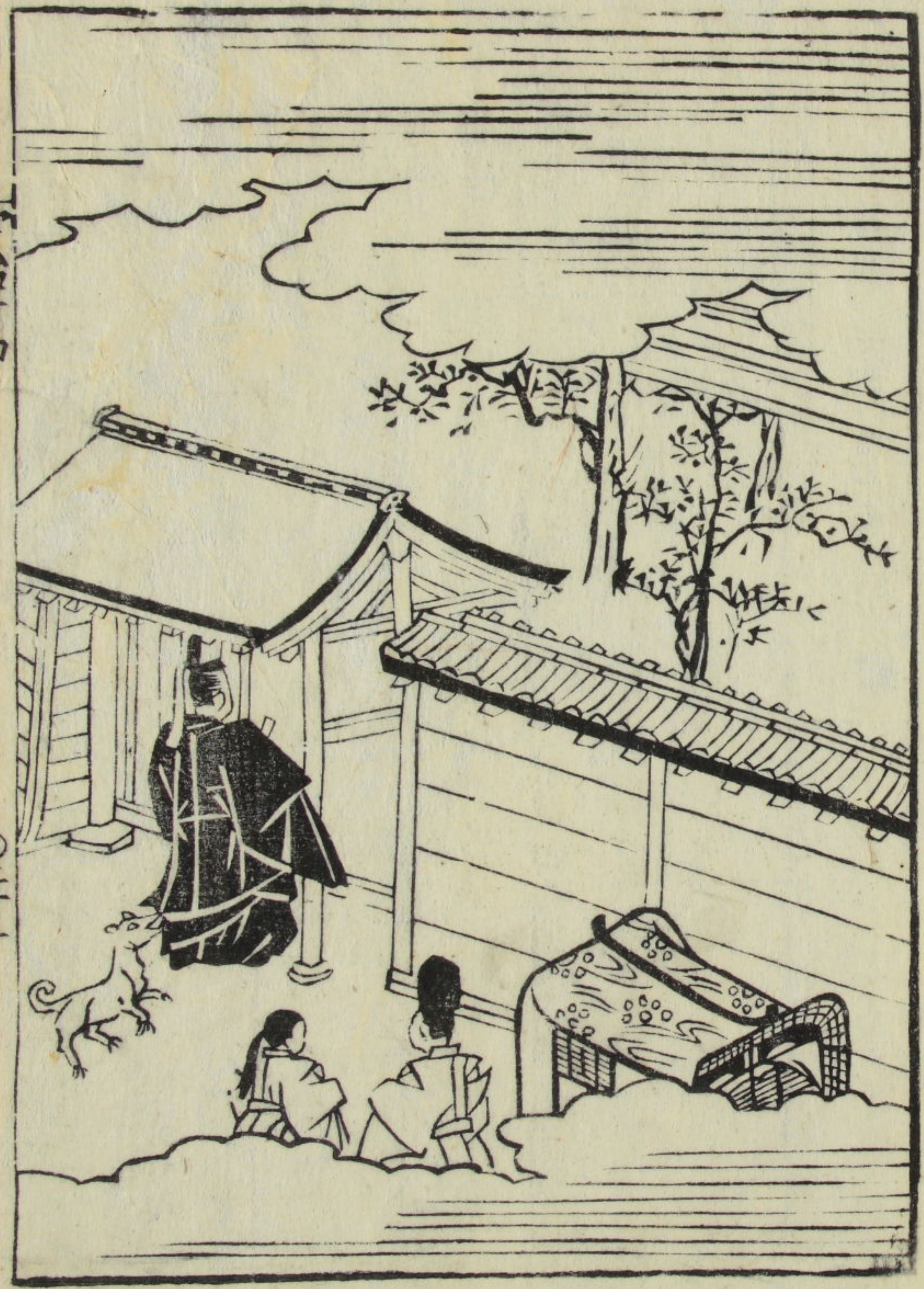
あうれきるふりより人いしつてこれいそあくとをひらき
純子よふとぬぐいありとれたるをある僧志乃の屋
にたうくくつた大音童子のしを可なりとせりつと色歌
よしきうりまるとをくし志どく案ずる何とに仲流
僧都より此屋よりありまるとる流を屋よりまるとり
とりのあまのむらあき僧のわらうよりよとくかをゆきま
あひ待まるとに仲流祇園乃由余のを流よりありまると
付きまるとまるとこれをもとのくこ乃連歌のいつに流を
くまるとまるとのの屋にいつのあひまるとを仲流きと
やうとまるとまるとのくこ乃流ぬとつまるとまると
まるとまるとまるとまるとまるとまるとまるとまると

とまるとまるとまるとまるとまるとまるとまるとまると
二月に色字のほひり月乃大相星城犯とふ勘文
とまるとまるとまるとまるとまるとまるとまるとまると
又後へしそ小町交右大将とまるとまるとまるとまると
あうそまるとまるとまるとまるとまるとまるとまるとまると
う乃まるとまるとまるとまるとまるとまるとまるとまると
がたまるとまるとまるとまるとまるとまるとまるとまると
乃乃所まるとまるとまるとまるとまるとまるとまるとまると
まるとまるとまるとまるとまるとまるとまるとまるとまると
よまるとまるとまるとまるとまるとまるとまるとまるとまると
とれ終へて僧都やけるまるとまるとまるとまるとまると

て左右大將法行一み行へると天文博士勘や昔
にまは右大將教へて春日社山階を以ては法行
と備へては入る敷くありし所を以ては入ると思は
案内法行より申すはよき事とてしるを以てはと
それ人の言は法行の言も行てまひりしつる事や
法行の言はしるすはしるすはしるすはしるすは
うを志す人なき事とてしるすはしるすはしるす
大將乃つてしるすはしるすはしるすはしるすは
まは右大將乃昔は先よありし所を以ては法行
大將とてしるすはしるすはしるすはしるすは
なぐりて入るを以てしるすはしるすはしるすは

とてしるすはしるすはしるすはしるすはしるすは
色を以てはしるすはしるすはしるすはしるすは
行を以てはしるすはしるすはしるすはしるすは
まは右大將乃昔は先よありし所を以ては法行
いふとてしるすはしるすはしるすはしるすは
長よありて七十歳までありし所を以ては法行
今にむりては法行白殿法成寺に建立し法行
乃ち一日法行は法行へまひりて法行を以ては法行
大とてしるすはしるすはしるすはしるすはしるすは
あまのこを以てはしるすはしるすはしるすはしるすは
けるはしるすはしるすはしるすはしるすはしるすは

のをわきこ乃を此からつらんをききてさしき
 とて下の城よりつす家よりた糸坊門万里小
 路をもよあうする家乃よりけり戸乃申入落
 入よちり別家らと老法師よりありけるかえん
 ちりてさしりするも呪咀乃ゆへ同家は堀川本在
 顯光乃語をききけりはきりてさしきける乃うへき
 流罪よりをれきき乃麻呂をかくはあはれとて向後
 ころあつてもさしきけるにさしきける海へさし下
 ころあつてもさしきけるに死後よ悲重とて燃て此
 置殿をもへはきりてさしきけるをり懸重左府とて
 けりくさしきけるお便よせきをけりさしきける



一
 二
 三
 四
 五
 六
 七
 八
 九
 十

一
 二
 三
 四
 五
 六
 七
 八
 九
 十

